

東日本大震災 MSW 災害支援ニュース



JASWHS 公益社団法人 日本医療社会福祉協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 27 年 9 月 2 日 第 5 巻 (第 5 号)

発行：東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル 2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

1. バトン寄稿 - Part 3
2. 山形医療ソーシャルワーカー協会より
3. 他団体紹介
4. 災害支援チームからのお知らせ
5. 災害支援ニュース発行のお知らせ
6. あとがき

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ」 発売中！！

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ」 発売中！！

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ」 発売中！！

詳細は“3. 災害支援チームからのお知らせ”をご参照ください。



1. バトン寄稿 — Part3

~~~~ ~~~~ ~~~~

当協会の東日本大震災での支援活動は、5年目を迎えました。それぞれの時期に当協会の会員であった方々が責任者や担当として、現地にて協力員と共に支援のバトンを紡いでくれました。

~~~~ ~~~~ ~~~~

振り返ってもらいました。

.....

災害支援チーム

武山 ゆかり

(2011/12/18~2012/7/30まで現地責任者として石巻に常駐)



「寒くなる前に！前任者から引継ぎをして欲しい！」…と、日本協会に急ぎ立てられながら用意をした。10月に介護をしていた母の施設入所が決まり、東京都協会の運営を理事会と副会長に頼み、11月の難病訪問診療数か所を終わらせ、何回かの行き来の間に、母が急な多臓器不全で亡くなった。その日のうちに、献体をしていた大学病院に送り、兄妹と献杯し、それが石巻赴任の送り出しの食事会になった。

まだ、雪の無い石巻の12月は、それでも冷たい風が家を失った荒涼とした空気を吹き抜け、1階がまだ補修前の家で暮らす被災在宅者の生活や心を凍えさせていた。土日は仮設住宅での「お茶っこ相談会」、平日は、その広報でお誘いチラシを配ったり、河北支所で行われる「仮設住宅入居者支援」の関係者会議への参加。災害による失職者への雇用対策も兼ねて就任された「見守り支援員」さんは、対人援助は初めての経験という方がほとんど。アルコール問題も、認知症も、どう

対応したら良いのか見当もつかないが「食べておられるんだかあ心配で心配で！」と心底優しい。寒い仮設住宅で迎える初めての年越しを、現地の行政もボランティアも、被災者自身も、皆で危惧しての対策会議が繰り返し開かれた。

一方、ボランティアや復興支援団体の在宅被災者の全戸調査が、「チーム王冠」や「祐ホームクリニック」に関わるメンバーで開始され、調査聴き取り項目から、緊急支援、詳細の再度聴取、自立支援開始など、誰がどう関わるかの振り分けも始まった。当初、看護師とMSWが振り分けを担当していたが毎日上がる数十枚の調査票を、受け取った翌日までにチェックし、緊急性の高いケースには即、電話・訪問・対応を並行して行うため、何日かは徹夜で、調査票のチェックに追われ、こなすには、3、4人のMSWが必要だった。

幸い、遊楽館福祉避難所当時から途切れることなく職員を送り続けている亀田総合病院や、長期支援のため休職した方、年末ぎり

ぎりまで滞在してくれた静岡のMSWと、力強い支援が続いて来てくれて、地域を走り回ってくれた。それでも、日暮れの早い時期で、土日の「お茶っこ」お誘いのチラシを、凍える手で仮設住宅のポストに入れて歩く経験は、特に南の県協会のMSWには辛い経験だったのでは、と今も思う。人里離れた小さな仮設住宅に、やっと手に入れた小さなクリスマスイルミネーションを飾り、夜9時過ぎに消しに行ったホワイトクリスマスも、石巻日和山の教会ミサも寒い中での思い出だが暖かい。

年末年始は、どこの組織も支援休みになるので、単身病弱な在宅避難の方にお米や食料を調達し届けておいた。年明けに何うと、調査に来たお姉さんたちが材料持ち寄りで鍋をしに来てくれた、と賑やかな正月ができたこと感謝された。仮設住宅はそれなりに行事もあったが、飛びとびに流され残った家屋の在宅被災者には、寂しい年越しであったようだ。

年明けから、予想していた事態が起こり、計画は変更が続いた。仮設住宅の水道があちこちで凍結し、トイレも使えないため、お茶っこは中止。代わりに、10Lポリタンクの水を各戸に運び、安否を確かめるなど、ボランティアや見守り支援員さんとの協働が進んだ。トイレも、凍結を免れた方の部屋で借り、ついでにお茶やおしんこで、次のトイレの心配をしつつ、仮設を回った。行政には各仮設の凍結棟を報告し、対処を依頼した。次は結露とカビの問題だろうと予想した通り、2月～3月とカビの発生、手抜き断熱材問題などが見つかった。この頃には、市立病院の看護師の主催する「健康講話、血圧測定」等に同行し、医療福祉相談の案内をして歩いた。

開催前の個別声掛けにも看護師さんと組み廻った。この時の絆は今も続き、流された市立病院再建を共に心待ちしつつ1年1年を重ねている。

仮設住宅の自治会づくり、地元町会の案内など、夜の仮設集会所で開催される集まりに度々出かけたが、集会所の床は冷たく、特に端で「相談員さんの案内」の出番が来るまで、正座して待つのは厳しく、仮設住宅のすきま風と壁・床の薄さを実感した。集会を終わって外に出ると、真っ暗な仮設住宅の周辺であったが、星がたくさん瞬き、市の職員もやっと業務を終え、疲れた顔なのに、こちらの参加を労ってくれた。

在宅被災者への支援は、調査の振り分けを新しく参加してきた看護師等が引受けてくれ、MSWは、相談・訪問に専念できるようになった。「自立支援」がMSW、「受診、健康、予防」等は看護師が「心理、不眠」などは臨床心理士が週末などに訪問する体制が整って来た。また住宅問題は補修、修繕申請などに建築士等が常駐し相談にのるなど専門分化とそれぞれの工夫が発揮されるようになり、MSWも「こんな時はMSWに相談を」という掲示を、仮設や地域に貼り出す、チラシを各戸になど、宣伝を始めた。牡鹿半島、雄勝地区と、初めて回る地域の被害の大きさに、まだまだ仕事があることを感じたが、連絡先を書いたチラシ配布が精一杯であり、拠点を構えるキャンパスやほかのボランティア団体に任せるしかなかった。その後、ボランティア諸団体に使ってもらえる、「こんな時は…」シリーズの作成に関わり、こんな時にはMSWの活用をなども含め、専門家としての関わりや、仕事内容をアピールし、分

担し支援する体制を創ることが出来た。

走り回る先で、鶯が鳴きはじめ、タラの芽が芽吹き、ワカメがお茶うけに出始め…、1年が巡ってきた。保健師さんや、看護師さんたちも、住民の落ち着かない様子を報告し、自分も…と会議で積もった気持ちを吐露されることがあった。神戸から来たMSWが「それが自然な反応なんですよ、被災した3月11日前後、みんなそんなふうになる。それが普通なんですよ。」と経験を話してくれた。何だかフツと肩の力が抜けた表情が、会議に戻った。

4月、終了するボランティア団体もあったが、新たに参加される仮設診療所の医師や、協会の常駐スタッフも増え、支援団体も整備され、分担や方向性も見え始めてきた。行政も支援職員が力を発揮し始めたのか、支援が入ることにもなれたのか、落ち着いてきた。

地域では、アルコール、DV、不登校と、以前からあった問題が、全国からの支援物品や見舞金などの経済支援が、減少したり、無くなったりしていく中で、より深刻な困難を家族や近隣に与え始めていることが見えて

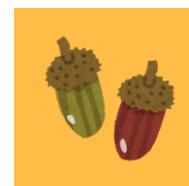
きた。ひとつ一つのケースに寄添うには、頻繁な訪問や長期の声掛けが必要で、交代を繰り返す支援では進展しない。新たな支援のかたちが必要とされる局面に変わって行った。若い新たな現地担当者や、新しい支援NPO団体との共同事務所、支援者の宿泊施設と、支援や仕事の環境も整い、よりMSWの専門性を発揮できる環境も生まれてきた。1年前の夏は、福祉避難所でひたすら被災者の話を聞き、これからの生活の場を一緒に探した。2年目の夏は、これからの自分や親族の生業や「自分の家」がどうなるのかの不安とあきらめの傾聴が多く、重い課題はまだほとんどの人は解決せずにいる。今、4年目の夏、やたらと空地の増えた市街地、新しく出来た商店街に復興住宅地。様変わりして、震災を忘れていく景色と反対に、もう取り戻せないことが確定した以前の生活の思い出の中で、仮設や仮住まいから、人々は次の住まいに移行している。残る方の苦悩はこれからますます深まる。支援は、移りゆく時と共に変化して続く。

~~~~~ . . . ~~~~~

## 豊島区医師会 豊島区在宅医療相談窓口

中辻 康博

(2012/5/21~2012/10/30 まで現地担当として石巻に常駐)



私は東日本大震災を滞在先のインドで知りました。当時、無職だった私には戸惑いや不安がありましたが「できることをできる範囲で…」との想いで、帰国後にはじめて東北を訪れました。震災から10か月以上経過し

た真冬の石巻でした。

災害支援活動協力員として仮設住宅を回って「お茶っこ」に参加したり、各掲示板への「チラシ貼り」に行ったり、活動していく中で初めて仮設住宅の住環境を知りました。

ここでどれだけの期間、生活していくのか…先の見えない不安があるにも関わらず、明るく温かく迎え入れてくれた住民の方々に逆にパワーをもらいました。

その後、日本医療社会福祉協会の現地担当者として継続活動を行うことを決意し、アセスメント班が調査してきたケースに対して専門職がフォローする「石巻医療圏 健康・生活復興協議会」の一員として、なかなか目や声掛けが行き届かない在宅被災者支援を中心に活動するようになりました。

- ・医療が必要だけど様々な理由で受診につながっていない方の受診受療援助
- ・失職してアルコールに依存しそうになっていた方を何度も訪問し就労につながった支援
- ・病院の MSW と退院時から連携し、経済的・生活問題に関わった在宅療養支援など

協議会の多職種、地域の関係機関と連携・協働支援し、「地域」をフィールドとした医療ソーシャルワーカーの重要な役割を感じることができました。

現地担当を離れてしばらくは数カ月一度、日本医療社会福祉協会の協力員として訪問し、担当していた方のその後の様子を伺ったり、現地担当者の業務を整理したり、継続的に活動してきました。

震災から 4 年 5 ヶ月あまり経過した現在

でも可能な限り、機会を作り訪問しています。先日も連休を利用して石巻を訪問し、駅前の再開発(市民病院の建設)、建設途中の復興住宅、取り壊されたアーケード、新しくオープンしたお店など、数年前とは様変わりした街並みを感じることができました。

その一方で、変わらない仮設住宅の風景がありました。現在もなお、そこで生活している方々がたくさんいます。「仮の住まい」での長引く生活は住民の心や身体に大きな負担となっていることと思います。数年前から問題視されていた劣化(仮設ゆえの脆さ、寒さ暑さ、カビ等の健康への影響)の深刻化や孤立問題に対して、地域福祉コーディネーターなどと協働で、傷み具合や住民の意向を細かく把握していき、健康や精神面へのケアをしっかりと行なう必要があると考えます。

今後は、仮設住宅から復興公営住宅への移行の過程で生じる問題(コミュニティ形成・再編、経済的問題など)にどう対応していくかが、支援の中心になるのではないのでしょうか。住民の方の「どんな状況でも住み慣れた地域で安心して暮らしたい」との想いに寄り添い、支えられるよう幅広い視野と守備範囲で、医療ソーシャルワーカーとしての底力を発揮できればと思います。現地訪問してできること、遠く離れていてもできること、「できることをできる範囲で…」考え、行動に移したいと思います。



## 2. 山形医療ソーシャルワーカー協会

山形県医療ソーシャルワーカー協会

副会長（社会活動部門長） 伊藤 直行

~~~~ 東日本大震災発生から今日へ ~~~~



はじめに、これまでの当協会活動について簡単にお伝えしたいと思います。東日本大震災の発生後、当初、すぐにでも現地への支援に行きたいと思っていましたが、各自院で多くの被災者を受け入れ、県内避難所の支援などもあり、山形を離れることができませんでした。5月には有志による会員が石巻現地支援に向かい、8月には県協会内に災害支援部門（現在は社会活動部門と改名）を発足。組織的に募金活動、広報活動、人的支援を行ってきました。当時は全国各地からの協力員が現地で活動する中、隣県でありながら現地に行けないもどかしさと、何もできていないのではないかというむなしさが会員の中に漂っていました。

震災後5年を迎え、正直、風化しつつあるのではないかという危機感を肌で感じています。そのような中で、研修会の度に募金活動を行い、今年7月17日にも山形県と山形県協会の共催で山形県医療従事者研修

会が開催され、約100名が参加しました。その一角で石巻災害支援チームの広報活動と募金活動を行いました。現地職員に無理をいって活動内容をポスターにしてもらい、事務局からも、バトンの販売チラシと募金箱も送っていただきました。出入り口の場所でしたので、現地の活動報告に目を凝らし、見入っている方もいらっしゃいました。

災害当時、学生であったMSWも増えてきました。山形でどんな活動をしてきたのか、今後どのような備えが必要なのかを伝えていきます。また、被災者や支援者の皆さんが、いま何を必要としているのか、私たち山形県協会は一緒に考えていきたいと思っています。「支援の本当の意味」を考え続け、これからも継続して…

最後に、お忙しい中、現地活動の資料を提供して下さった現地職員の方、販売チラシ、募金箱の調整をして下さった災害チーム事務局の方にお礼申し上げます。



3. 他団体紹介

キャンパス東北

2011年3月19日以降、東日本大震災の被災地域において、人・地域に寄り添いながら、医療・介護・生活に困っている方の支援をしています。

看護師、作業療法士、社会福祉士、一般職がチームとなり、連携をしながら、下記のような支援活動を「東日本大震災におけるミッション」として遂行しています。

- ① 孤立、孤独死の予防
- ② 安心して暮らせる地域の復興

[主な活動内容]

看護委託事業

健康相談会、個別訪問、コーディネート業務

リハビリ委託事業

リハビリ相談会・集団体操、個別訪問

地域作りコーディネート事業

地域作りのサポート、リサーチなど

自主事業・助成事業

おらほの家開放（JPF、富士火災ふれあい、等の各種助成事業）

救護班（復興グルメF1、音楽祭、カヌー教室など）

気仙沼や石巻市鹿妻地区での健康相談会、個別訪問など

牡鹿クリーンプロジェクト（清水田浜周辺の清掃活動）※住民さんに移管

折浜マザーズ（起業支援）※住民さんに移管

子供合宿（こども∞感パニーとの協働）

他連携団体と協働して石巻市での健康サロン活動

その他：報告会や講演会、各種イベントを随時開催

※ 上記の活動（看護部門・リハビリ部門も含む）は

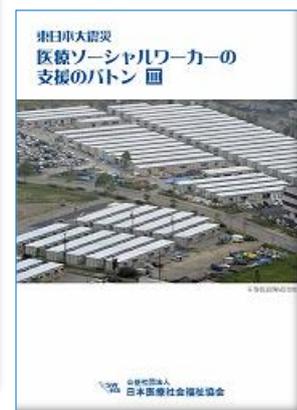
委託事業などでは補えない事を

自主事業や助成金事業で行っております。



補足：こども∞感パニー とは コドモムゲンカンパニー

発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅡ』に、



2013年1月から2014年3月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。

(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

バトンⅠ:URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

バトンⅡ:URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47

バトンⅢ:URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=54

【4.facebook】



facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いたします。

URL

<http://ja-jp.facebook.com/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部>

[/156327867812970](http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be)

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。



URL

<http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be>

5. 災害支援ニュース発行のお知らせ

.....

次回発行予定 9 下旬予定

6. あとがき

.....

災害支援チーム事務局から

編集担当 西田知佳子

災害ニュースの5号を皆様にお届けします。石巻で様々な機関や職種と協働してソーシャルワークを行っている現地スタッフや協力員の活動を、全国の協会の皆様によりよく知ってもらおうと思って始まった災害ニュースですが、認知度が低いのか記事が面白くないのか読んでくださっている方は数少ないようです。

私自身現場でソーシャルワークを行っていた時、協会のホームページを開いて、その中にさらに入ってその時に必要のない記事を読むと言うことはほとんどしませんでした。気持ち的にも時間的にも余裕がなかったのです。だから今、災害支援に関わる人たちが一生懸命記事を書いて校正して編集して出来

上がるニュースの読者が少なくても文句は言えません。とは思うものの、一人でも多くの読者を増やしたいです。誰かがこのニュースを待っていてくれると思うだけで、編集に携わる我々は毎月一回の発行を頑張らなくちゃと勇気づけられるのです。



東日本大震災 MSW 災害支援ニュース
平成 27 年 9 月 2 日 第 5 卷 (第 5 号)
作成 日本医療社会福祉協会
災害支援チーム事務局